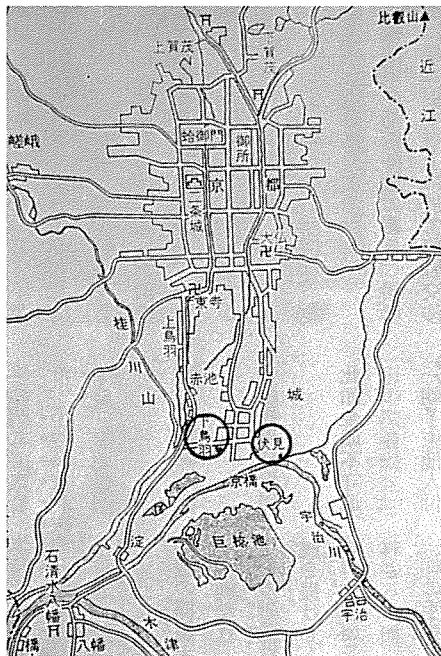




秋の山陣地



鳥羽・伏見付近の地図



題字 亀山雲平

編集：亀山雲平顕彰会
発行：長野哲
住所：姫路市木場
前七反町39番地
八家土地興産(株)
電話：(0792)45-0015
印刷：浜谷印刷株式会社

姫路城危急存亡の時

亀山雲平顕彰会

代表 長野 哲

鳥羽伏見の戦い

○○余名、これを迎え撃つ、薩長

軍は、鳥羽を守る薩摩軍二五〇〇

名合わせて五〇〇〇余名である。

慶応四年一月三日（此年九月八日明治改元）京都南郊、鳥羽伏見において、薩長軍と徳川幕府軍が交戦し、幕府軍は大敗を喫した。大坂城を進発した幕府軍一六四

○○余名、これを迎え撃つ、薩長

軍は、鳥羽を守る薩摩軍二五〇〇

名合わせて五〇〇〇余名である。

鳥羽の薩摩軍「秋の山」陣地よ

り、突然、ラッパの音が高々と鳴

り響いた。

その直後アームストロング砲が

大坂城に居た將軍徳川慶喜は、



鳥羽・伏見街道

そこで藩庁は大目付をして、城下村々大庄屋、庄屋役人に對し、デマにまどわされず、落着いて生活するよう通達を出して治安の安寧をはかつた。

姫路城攻撃さる

この時、姫路藩主酒井忠惇の從

者たちが遅く、殿を見送りに来

てしまつた。

ランダ製新鋭艦開陽丸で江戸へ帰つ

この時、姫路藩主酒井忠惇の從者たちが遅く、殿を見送りに来て、姫路藩大目付小寺嘉兵衛（後、切腹）が大声で殿のお刀を早く早くときかんっていたのが、妙に印象に残つたといわれている。

一月十一日幕府軍に参戦した姫路藩に対し、追討の勅命が発せられた。播磨一円の諸藩は全て朝廷に恭順していた。そして姫路城攻撃の態勢を敷いていた。

特に大藩、備前岡山藩主池田茂政は一五〇〇余名の兵を差向けて姫路城攻撃軍して来た。

この報告を聞き、会津藩主京都守護職松平容保、桑名藩主所司代松平定敬、備中松山藩主老中板倉勝静、姫路藩主老中酒井忠惇ら数人を従えて、大坂城を抜け出し、裏門より小舟で天保山沖へ出て、オ

藩士姫路へ帰還

鳥羽伏見の戦いに幕府方に味方

した姫路藩士七〇〇余名は、忠惇の命により、家老高須隼人広正、永田祖武助成訓に引率され、九日

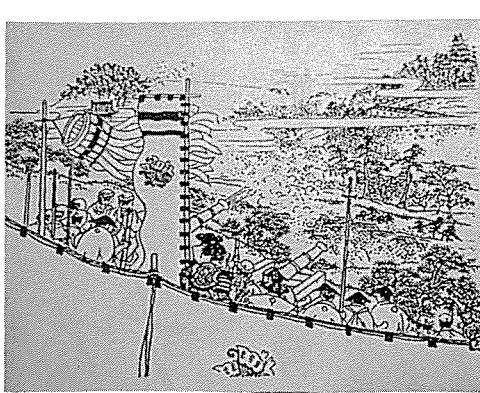
姫路城に帰つてきた。

ところが城下では種々なデマがとび交い、人心

大いに動搖し、町中不安に怯え切つていて。夜逃

げの準備をする者さえ出

た。



景福寺城砲撃の図

そして藩庁に對して、無条件降伏を迫って來た。これを拒むならば直ちに総攻撃を開始して姫路城を武力により占領すると強談して來たので、重役達は色々協議した結果、朝命に復し、無血開城することに決し備前軍に従うことを約した。ところが、一通の手紙がこの平穏裡の解決を一変させた。

東上中の長州軍大將杉孫七郎から備前軍宛に備前軍の姫路城接收交渉は手ぬるい、攻撃して占領せよ、若し備前軍が攻撃しないなら長州軍が攻撃すると言つて來たので、備前軍は亀山雲平らとの平和的解決を破棄して、いきなり砲撃して來たのである。そのことを知らない姫路方は、門や藩庁の建物

で、備前軍は亀山雲平らとの平和的解決を破棄して、いきなり砲撃して來たのである。そのことを知らない姫路方は、門や藩庁の建物

が壊れ砲弾が飛来したので、不意を突かれ城内は上を下への大混乱に落入り收拾が付かなくなってしまった。激怒した藩士達は備前とに戦うべしと切歛扼腕する者、速やかに和議を唱える者、いづれもが備前軍の非を罵倒した。

この時備前軍との交渉係は、亀山雲平と齊藤鑑介であった。

備前軍の前線陣地である、船場川に懸る福中橋上に於て停戦交渉開始、この時家老大河内帶刀、松平孫三郎、麻上下の礼服を着し、

雲の中の高い城壁のぬき窓が山崖の上にならび建ち（姫路城）

十萬の封侯は、数世の民を率いて、勢此上なく盛んであった。

しかし、このような金城も先祖の遺産も守り切れずに、今朝の手束にとうとう他人に（備前軍）渡してしまった。

正月十六日有懷去年此夜兵馬之事。

明治元年正月十六日官兵來攻姫路淡い月が窓辺近くの梅に照って入城來、兵馬迫吾郭市街、聞砲声未知主君、罪已負賊臣名揮、涙致関鑰脱刀奉、誓盟月寒郊外寺、宿座三更。

関入不許各刀徒者渡入備将中史座 振者勤王事喚旦銃器献益此夕二老 景福寺因。た、小谷長父が次の記録を残している。

小谷長父 団



小谷長父

正月十六日去年のこの夜に兵馬のことを思い出す。官軍我が姫路城へ攻め来り、他意なく開城した。一痕淡月掛窓梅

淡い月が窓辺近くの梅に照って入城來、兵馬迫吾郭市街、聞砲声未知主君、罪已負賊臣名揮、涙致関鑰脱刀奉、誓盟月寒郊外寺、宿座三更。



亀山雲平

疎影清香好舉杯 その梅がまばらに見え、清香を放っている。酒杯を傾けるのに丁度よい夜だ。

不以去年兵馬夕 思い起せば去年は戦乱にくれ、砲煙がまっしぐらに城に飛んでしまった。

この時の模様を亀山雲

松平二老護本營景福寺帰将帶刀玄 亂の際に開城表無他意 一痕淡月掛窓梅、疎影清香好舉杯



姫路 瑞松山 景福寺

杯、不以去年兵馬夕、砲煙暮地 入城來、兵馬迫吾郭市街、聞砲声未知主君、罪已負賊臣名揮、涙致關鑰脱刀奉、誓盟月寒郊外寺、宿座三更。

無念の涙をこぼさぬ者はなかつた
といふ。

藩士の帰城を許さる

二十三日御勅使四條隆謙、鎧甲を着し御乗馬にて三〇〇名の御供にて、先供薩摩、明石、後供芸州が続き姫路城に入城した。

備前池田美濃守、同図書頭、同隼人御出迎い甚だ美々敷誠に絵に画かれたが如く實に立派であつたという。そして姫路城接取の巡視も済み、官軍に対し、無血のうちに城を引渡したことは神妙の至りとお褒めの言葉を賜わり当三十日を以て立退きし藩士に帰城を許された。十日振りに元の我が家へ喜び勇んで帰ってきた。

朝廷に謝罪の事

亀山雲平急遽江戸へ

姫路城攻撃、開城は一応一段落したが、藩主不在なので、重役協議の末、前藩主忠續現藩主忠惇の二人に帰城して貰うことに決した。忠續、忠惇の説得役を亀山雲平が指名された。雲平は大目付であり藩校好古堂教授を兼ねており、



大老姫路藩主酒井忠續

家定の従妹が酒井忠宝に嫁している。又徳川幕府三〇〇年の間に二人の大老が出たがその内四人が酒井家が務めている。老中も数人いる。以上の様な間柄であるから

二藩主の信任がもつとも厚かつた。

これに依り亀山雲平は直に江戸へ向けて出発した。途中京都に立ち寄り、酒井家から輿入りしている、

五攝家筆頭の九条大納言幸経公の廉中妙寿院(鍾姫)に相談して、

忠續宛に意見書を認めて貰い、又

口うつしにいろいろと情勢判断を

聞いて、添書を胸に急いで江戸へ向った。道中色々と困難な目に遇つたが切抜け、江戸藩邸に着いた。

忠續、忠惇に妙寿院の添書を渡し又国元及び京都の様子を説明した。特に忠續は大老であり、九条家とのつながりにて、京都には多くの人脈があり、顔が広かつた。

そこで雲平は忠續に帰郷して朝廷に對して、今までの不敬に対し謝罪してくれるように申上げたが

忠續の言い分は、我が酒井家は

徳川家と祖先は同一にして、且つ家康の妹が酒井忠利に嫁し、将軍家斉の娘が酒井忠学に嫁し、將軍

大津市 大施山 西福寺

家定の従妹が酒井忠宝に嫁している。又徳川幕府三〇〇年の間に二人の大老が出たがその内四人が酒井家が務めている。老中も数人いる。以上の様な間柄であるから

り連絡あり、忠邦の京都入りは差止めになっていることを知った。

大津本陣で宿泊する予定を変更して、大津駅近くの旅館街の奥にあ

中山道も東海道も全部戦場だ。
纏出重圍赴帝京
やつと囲みを脱出して京に向つて出発する。

や。

中山道も東海道も全部戦場だ。

や。

れるのにいづれの道を選ばれる

や。

や。



最後の姫路藩主酒井忠邦

播州の山、丹波の川にはなお雪が振り積もる。

播山丹水雲猶横

播州の京都の門を挾むこと

ともできない。

そこで支藩の伊勢崎藩主酒井忠

居して貰い別に養子にて新藩主を立てるごとを承諾してもらつた。

謹慎した。

強の弟直之助(後忠邦)を忠惇の養子に迎え、忠續にかわって上京

朝廷に謝罪せしめることとした。

又理軽装向武城

また軽装を整えて武城に向う

桂都春色甚荒涼

京都の春景色は此上もなく淋しい。

五十三亭兵馬門

東海道五十三次の中宿場に兵馬が

九条殿の藩邸での正月ご旅行の

支度はできあがる。

とどまり。

九条殿の藩邸での正月ご旅行の

竹輿印軋度幽山

忠邦公の乗つた竹の輿のきしむ

戸を出立した。初め東海道を通る

予定であったが、官軍江戸攻めのため進軍中のニースが入り、

急遽中仙道に変更して道を急いだ。

忠邦一行は、三月三日、大目付

公子赴京何路好

忠邦公(直之助)は京都に向わ

然し道中は正に風雲急をつぐ時節でどこも戦場の様であり、両軍の警戒線もあり、危険な道中であつた。

忠邦公の乗つた竹の輿のきしむ

とどまり。

忠邦の言い分は、我が酒井家は

徳川家と祖先は同一にして、且つ

家康の妹が酒井忠利に嫁し、将軍家斉の娘が酒井忠学に嫁し、將軍

大津まで来た時、国元よ

り藩校好古堂教授を兼ねており、

忠續、忠惇の説得役を亀山雲平

が指名された。雲平は大目付であ

り藩校好古堂教授を兼ねており、

音を聞き乍ら函山を越える。
誰言幕議背朝旨
誰言うとなく、幕府は朝廷の意
旨に背き。

坐待王師不鎖関

じつと王師の来るのを待ち、関所を開けているのだと聞く。

湖頭春寺駐公輿

琵琶湖畔の春の寺に、忠邦公の輿はとどまる。

聽雨看花十日餘

雨の音を聞き、花を眺めること十日程になる。

未識何時入京洛

何時の日に都に入れるのか分からぬ。

排燈重綴雪冤書

夜灯をつけて、恥をそそぐため冤書を書きつづる。

西福寺に、謹慎しながら、朝廷

に対して忠績名義の嘆願書を作り、

小浜藩主酒井忠禄を頼って、嘆願書を太政官に奉り、不敬の罪を謝し、実効を立てゝその罪を贖うた

め、忠邦をして己に代りて入京せしむる旨を述べ、忠邦に対しても入京の恩命を賜わんことを奏請した。

然し全ては政府に無視され、何の沙汰もなかつた。

まさに一藩危急存亡の関頭に立至つた。藩中の憂慮は極に達した。

て、いるのを知った兵右衛門は、兼ねてより懇意にしている新政府重役兵庫裁判所判事（知事）岩下佐

次右衛門方平について相談し、姫

た。

ところが、獻納する軍資金十五萬両の調達に困ってしまった。

藩は又しても、神田兵右衛門に懇願した。

要請を受けた岩下方平は、兵庫

裁判所総督東久世通禕が神戸にきたのを幸に、通禕に姫路藩の状況

視察を勧めた。通禕は、伊藤博文、寺島宗則、中路延年、岩下方平等

を従え、三月二十一日姫路に来て

船場本徳寺に入った。

藩重役達は万事通禕の指図に従

い朝命を遵奉することを誓った。

新政府の東北出兵に加わりたいと願い出たが許されず、そのかわりに軍資金十五萬両の献金を命じ

た。藩は直に献金を獻納すること

を言上した。

これに依り、大津止めになつて

いた、忠邦に一先づ姫路に引取り

勅を待つことを命じた。三月二十

六日供揃いで大津西福寺を出發し

ルに着き、船場本徳寺に入つた。

特旨ヲ以テ位記ヲ賜フ

明治四十二年十一月二十八日

叙從六位

素封家三男

務める

大庄組の町市大塩姫路在姫

塩大路市姫路

藩大塩姫路

鹽

（現）

西福寺額（龜山雲平宿泊の部屋）

明治丙戌小春月
永遠神社鑑定
一九五九年題

であり、兵庫の実力者岩佐屋神田

の若き少年新藩主酒井忠邦を驚喜して出迎えたという。

た。生まれ故郷の姫路藩が困惑し

明治元年五月二十日ついに忠邦に家督相続を命ぜられ、姫路藩十

五萬石は酒井家に賜り、本領安堵された。

ところが、獻納する軍資金十五

萬両の調達に困ってしまった。

藩は又しても、神田兵右衛門に

頼つて調達して貰つて獻納を完了

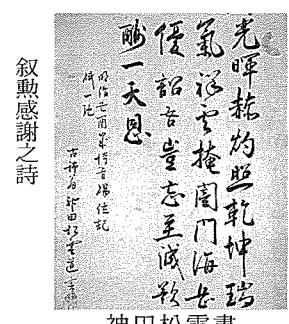
した。酒井家ではこの功に感謝し

て、酒井家重来の家宝の品を贈り

藩からは、毎年三〇〇〇俵の酒造

米を貸与するなどその功勞に報い

た。



神田松雲書

光輝赫灼照乾坤瑞
氣溢雲龍闕門海岳
優韶吾豈忘至誠韻

酬一天恩

古希翁神田松雲道書印

伊奈平八の活躍

京都五摂家筆頭九条殿の大納言
幸経の廉中「肫子」後、妙寿院と
号すは、姫路藩主酒井忠学より興
入した「錮姫」である。

依つて幕末動乱の時代にあって、
賊軍となつた、実家姫路藩の行末

を案じ、色々と朝廷新政府工作に
尽力された。藩主忠績、忠惇はこ
の妙寿院肫子に対して数人の藩士
を護衛せしめていた。

その内の最も有能な藩士伊奈平
八高令譲は藩校好古堂教授である。

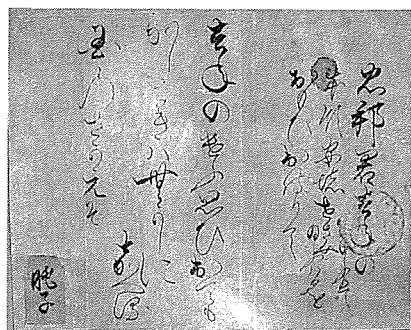
酒井忠邦の家督相続について、九
条殿の指示に従い東奔西走した。
そして遂に、明治元年五月二十日
酒井忠邦に所領十五萬石を賜わっ
たのである。

この時、妙寿院は生家の旧十五
萬石所領安堵を喜び、伊奈平八の
苦労と尽力を謝し、次の歌文を贈つ
たものである。

忠邦君去年の事おもひて
本領安堵をされ給ふけるを
おもひばかりて、

去年のけふ、思ひ出ても、

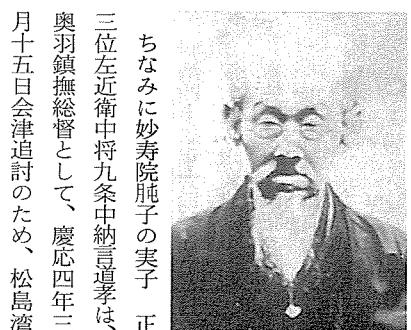
かしこきは、むかしにかかる、
國のさかえぞ、



妙寿院(錮姫)書 伊奈健一氏蔵

之恩典女君感泣拵臺同二年五月君
想客歲之慶賀作祝歌以賜讓々亦感
泣尊重以賜子孫為宝珍云

明治乙巳仲春伊奈讓謹書
妙寿院(肫子、錮姫)



伊奈平八高令譲

農兵隊十五名
古田秀一 丸山幾次郎
伊藤俊郎 石原良助
岡本金之助 平野兵部



龍野藩会津攻めの絵馬

ちなみに妙寿院肫子の実子正三位左近衛中将九条中納言道孝は、
奥羽鎮撫總督として、慶應四年三月十五日会津追討のため、松島湾に上陸仙台に出征した。

隣藩竜野藩官軍參加農兵隊

竜野神社奉額

王政維新ノ初メ軍務官ヨリ諸藩

ニ命ジ封一万石ニ参名ノ兵ヲ徵サ
レ即チ我等四藩ノ選抜ヲ以テ徵兵

五番隊ニ入り御所警護ヲ勤ム尋テ

会津征討ヲアゲルヤ仁和寺宮殿下
ニ供奉シ越後口ヨリ進ミ転戦數回

会津城陥ルニ及ビテ凱旋ス朝廷其

ノ功ヲ嘉シ畏クモ御所ニ召サレ御

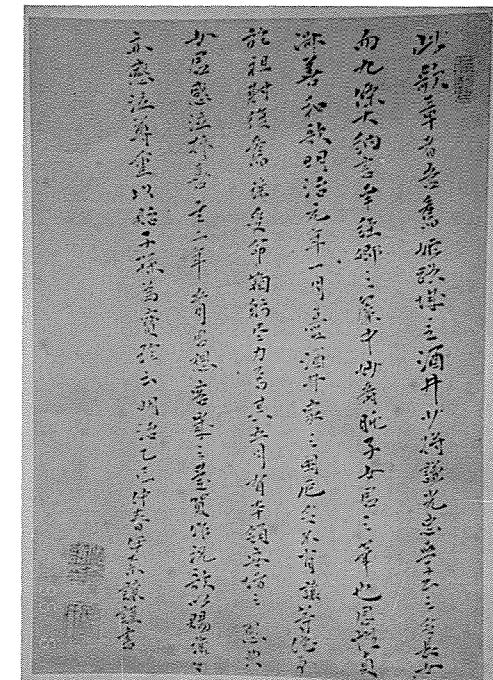
益ヲ賜ハリ恩賞ヲ授ケ賜給フ帰国

ノ後分捕ノ天幕式張ヲ旧藩ニ献ズ

藩主亦其功ヲ賞シ賞典禄ヲ賜ハリ

セラレ臣等ノ光榮何物カ之ニスキ
ン今茲ニ其一班ヲ画テ以テ奉納ス

明治三十七年七月吉日
明治維新会津攻メノ図



伊奈平八書 大阪経済大学教授伊奈健一氏蔵

京都御守衛士多田隊といふ。
隊員小監察、赤松護之助二五才

摂津多田院家人隊



亘り延一〇〇〇万人が工事人夫としてかり出された領民たちの苛酷な労役と莫大な費用負担と犠牲により完成された姫路城であることを忘れてはならない。

幾百萬の多くの人々の努力と忠誠と犠牲に依り築かれ、今日の世界文化遺産として完たる雄姿を誇る名城も尊い人命と死力を尽して築き守つて来た先人達によつて今日の榮あることを銘記し、感謝と賞讃と鎮魂の誠を表さなければならぬ。

この他、多くの藩より農兵隊が組織され官軍に従軍していった。

姫路白鷺城は我々播磨人の父である母である

吉之—吉明—吉里—吉次—好尚—昌彭—吉副—吉勘—益往—権次—茂理

天正十年（一五八三）武田家滅亡により織田信長の武将滝川一益が廻橋城主となるが、織田信長が本能寺において斬れるや滝川一益は本国伊勢へ帰る。そこで廻橋は再び北條の支配するところとなる。

天正十八年（一五九〇）北條氏が豊臣秀吉に降り、徳川家康が関東に転封されると平山親吉を三万石にて前橋城主に任じた。

慶長六年（一六〇一）になると酒井河内守重忠（修善院）が武州川越から国替えとなり三万二千石を領する。

雅樂頭忠世（隆興院）が九万二千石にて城主となる。元和八年に

十二万三千石となり、寛永十二年慶長十九年上州前橋に生まれる。



内山家 新装中

内山家のことども

播磨地誌研究会会長 濱嶋敏雄

亀山雲平の遺稿を整理編纂して

吉明 内山茂理

刊行したのは養孫の茂理である。

永禄六年（一五六三）越後にて

そこで彼の生家である内山家に遺される。信濃在住の時に家督を継ぐ。後上野国群馬郡廻橋の城下に

されている系譜その他の文書を覗つて内山家について紹介してみたい。

系譜によると次のようになる

吉之—吉明—吉里—吉次—好尚—昌彭—吉副—吉勘—益往—権次—茂理

前橋城は中世廻橋城と称した。延徳年間（一四八九～九二）に

筭輪城主長野一族の築城だとの説がある。

前橋時代

吉明（承前）

慶長年中從隆興院様被召出御知行五十石被下置代官役被仰付相勤候

ここで初めて酒井家と主従の間柄となるのである。隆興院は雅樂頭忠世である。

慶長十九年大坂冬の陣、元和元年夏の陣には吉明病のため御供が出来ないので、妻の先夫の子十郎右衛門を養子とし吉明に代つて出陣する。帰陣後十郎右衛門は内山家を継がず別家を立てる。

正保二年（一六四五）逝去す。

八十三歳の長寿であった。

雅樂頭忠世（隆興院）が九万二千石にて城主となる。元和八年に十二万三千石となり、寛永十二年慶長十九年上州前橋に生まれる。

（一六三六）に逝去す。

阿波守忠行（松巖院）がこの跡を襲う。その際遺領と部屋住み料の三万石を合わせ十五万一千石を領す。

この後雅樂頭忠清（大昌院）雅樂頭忠興（咸休院）雅樂頭忠相（永昌院）雅樂頭親愛（大葉院）と続き、雅樂頭忠恭（古岳院）の

（永昌院）雅樂頭忠恭（古岳院）のと続き、雅樂頭忠恭（古岳院）のと続き、雅樂頭忠恭（古岳院）の

寛延二年（一七四九）になって姫路へ所替えとなる。

幼少の頃より松巖院（忠行）に小姓として召し出されている。松巖院は前橋在城の際吉明の宅へ時よりお越しになつたと記されている。そのため吉里は松巖院に認められ幼少時に召出されたものと思われる。

吉尚 内山權右衛門
延宝三年（一六七五）江戸にて
生れる。

橋での城引渡役勤めに対し、褒美一両を受けている。

持となつてゐる

忠実であつて、家督を承いだ文政二年より天保十四年に至る二十三

元禄二年五月跡式七十石を相続し、御主殿番、検地役、代官など
を勤める。

寛延三年から十三年間宝暦十二年に至るこの間何度も褒賞されていて、この年には三十石加増され九十石高になる。

町奉行兼役被仰付候事
寛政四子年正月十八日
一、當子年より五ヶ年嚴敷御
僕約中兼役被仰付候
町方諸色

仰せつかつてゐる。翌年九月帰府まで御供日記、それも図入りで書き記してゐる。

江戸詰となつて二百石を死がわ
れ御側用人に任せられている。し
かし病弱だった。願い出て熱海で
の湯治の帰途病死す。寛永十九年
(一六四二)二十九才 父吉明在

世中である。この時妻は懷妊していて産み月であった。死後間もなく男子が出生したので吉明は嫡孫の相続を願い出て許可を得ている。

正保二年（一六四五）祖父の跡
式五十石を承ぐ。
萬治二年（一六五九）十八才になつて江戸詰を仰せつかり御供番となる。その後寛文年中に五十石加増されている。

天和元年（一六八一）病身のため願い出で国詰となり、検地役、山奉行などを長年勤めあげている。元禄二年（一六八九）四十八才にて卒去。この時から禅宗より浄土宗に改宗している。

嫡子十太衛門幼少より極めて病弱であったので幽居していた（享保十六年三十六歳で病没）よって享保十二年（一七二七）甥昌彭を養子とし翌々年の延享二年に隠居寛延二年（一七四九）姫路へ所替えとなり、翌三年七十六歳の生涯を姫路にて閉ず。

明和六年（一七六九）に隠居する。
安永六年八十一才の長寿を全うす。

町方諸色
直段改方兼
町奉行 内山権右衛門
出測新五右衛門
僕約令により町奉行によつて商品の價格の調査を命ぜられた文言である。
寛政六年には三十石加増されて禄高百石になる。
文化十一年（一八一四）実子が

仰せつかつてゐる。翌年九月帰府まで御供日記、それも図入りで書き記している。

右の文言は御用日記冒頭のものであつて、二十石減とあるのは彼が養子であるがために減らされたのである。

御用日記から少し拾いだしてみたい。日記によると毎年十一月になると前年の勤書を大目付所に提出している。

元禄十四年（一七〇一）大野庄
兵衛の嫡男として前橋にて生れる。
母は養父好尚の妹である。延享二
年家督六十石を相続す。
寛延二年姫路へ所替の際御船荷
ならびに御家中船荷改役に就く。
又前橋城引渡しの節上使の御馳走
役を勤める。

明和六年父隱居のため家督七十三石を継ぎ御書物御用役を勤める。翌七年に御金奉行、安永二年（一七七三）には吟味役につき、安永六年に役料二十石を得ている。安永九年に町奉行に任せられ役料八十石を受けて百五十石取りとなる。

なかつたので池谷孫市の一男吉勵カズイチを養子にもらひうけ、文政二年（一八〇九）に隠居、同六年八十才にて病死す。

妻が懷妊していたので出産後その肥立ちが良くなつてから出立することになつていたので、姫路へ住居を移したのは八月半ば近くなつてからである。姫路へ移るや、前

天明五年（一七八五）に御鍾奉行になるが、寛政三年（一七九一）に町奉行に復帰している。この頃は藩の財政も苦しくなり儉約令が施行され、役料も減少して十人扶

門儀願之通隱居被遊御免 老
年迄相勤候ニ付御羽織被下置
家督百石之処二十石減少八十
石被下置候



御用日記 内山家藏

播磨聖人龜山雲平顕彰会会報

平成8年10月30日 発行

第7号

并好古堂句読手傳御番帳之通
相勤申候右之外當九月二十日
林崎流居合世話役被仰付四九

日之日相勤申候

右之外忌湯治御暇等無御座候

已上

内山權次郎印

本多意氣揚様

これは上増^{アゲマシ}の願いである。これ

に対し十一月晦日に河合隼之助が
出した通達を記している。

大付所

午は文政五年である。

文政六年八月二十八日以深御

趣意當九月より来る酉九月迄
除閏月二十五日の間格外之御

儉約被仰出候尤^{*}上米増七割に
被仰出候

この年に儉約令の施行を徹底さ
せるため、藩主忠実は藩士を参考
し、自らの言葉を与えた。その上
自筆の書を奉行に読ませ、この写
しに老臣等の連署を加え家中に頒
布したのである。

文政六年十月一日養父權右衛門
病死、十一月二十三日忌明けによ
り出勤 その時次のような願書を
月番家老本多意氣揚に提出してい
る。

願書

此度出格之御儉約被仰出候ニ
付私儀家内少に茂御座候得日
別而万事少略仕右御限中上米
うか。

残五十四俵壹斗四合之内拾俵

宛奉差上度此段奉願候 巳上

十一月

内山權次郎印

この年以後になると毎年二月に
人別書を勘定奉行所に提出してい
る。

申二月 内山權次郎印

午年巳來

買掛

勘略奉行所

余り聞き馴れない
役所名である。人別書の受理のみ
が仕事であったとは考へられない。

勘略奉行所という役所は困窮し
ている藩士の財政再建を目的とし
て拝借銀制度の運用、又他借が嵩
んで整理に困っている藩士に対し、
手軽に簡略に相談に応じてこれを
処理するといったことを扱ってい
たようである。勘略とは簡略のあ
て字とか。

姫路城史によると役方の職制に
勘略奉行の職名は挙げられている。
この役は常役でなく臨時に命じた
もので、嘉永五年（一八五二）四
月二十四日勘略奉行三人を命じた
とある。この権次郎の日記によれ
ば更に二十年余り前に置かれてい
たことになる。

内下二人

妻十九才

男子三才

下女

出奉公

一、一年給銀五十匁 出奉公

一、同 同 八十匁 下女

右之通外外借買掛等無御座

候 巳上

成二月 内山權次郎印

人別書と称しているが、人別書
と称してよいのかなどと思える。

もう一例

天保七年覚

妻十九才

男子四才

下男

乳母

下一人

女十才

夫

内山半左衛門様

三月 内山權次郎

一、銀切手 百匁 下男給

一、同 百匁 乳母給

文政から天保にかけて儉約格が
出され、上米を課せられたりして
経済上苦しい藩士も多く何度も置
かれたのである。姫陽秘鑑によ
ると天和四年（この年改元されて
貞享となっている、一六八四）

此度御儉約被 室津御番

仰出御年限中 内山權次郎

御役料半數被 濱嶋重左衛門

下置候 佐治八茂藏

勤約格によつて役料半減の通達
である。濱嶋重左衛門は筆者の四
代前である。家も内山家と一軒お

簡略奉行被仰初之事
とある。前橋時代である。古くか
らその例があつたようである。

勤書によれば天保二年まで好古
堂の句読手傳 林崎流居合の世話
役を勤めている。

天保元年（一八三〇）十月五日
に猪飼敬所を姫路に招待した節、
河合寸翁の命により好古堂の勤め
を繰り合わせて仁寿山校に案内し
てある。

天保二年正月十二日より仁寿山
校の句読手傳を兼務、五月六日に
御免、好古堂の宿寮肝煎を仰せつ
かっている。

天保五年八月江戸勤番、翌年十
月に帰国御主殿の御番となる。そ
の後室津、飾万津、家島などの番
方を勤めている。

天保九年九月十六日

本多意氣揚殿より被仰渡候由
ニ而大目付根岸源太衛殿より
通達有之候

此度御儉約被 室津御番

仰出御年限中 内山權次郎

御役料半數被 濱嶋重左衛門

下置候 佐治八茂藏

勤約格によつて役料半減の通達
である。濱嶋重左衛門は筆者の四
代前である。家も内山家と一軒お

播磨聖人龜山雲平顕彰会会報

平成8年10月30日発行

第7号

いての隣であつた。我が家の系譜によつても天保九年に室津御番方を仰せつかつてゐる。

御供日記より

文政十二年三月十一日に藩主在城中の御供番を命ぜられてゐる。

藩主忠実の帰城は五月十八日、翌年九月八日帰府のため姫路を發駕までの勤めである。この一年余りについて實に丹念に御供日記を書き遺している。この中から少し抜き出してみたい。先づ書き出し。

五月十一日御用場ニ而御在城

中御供番被仰付候則御月番御

頭御勝手方立合之大目付同勤

御供番并御徒士組頭此方江參

候ニ付此方よりも挨拶ニ參候

御供番衆それの役職相互の

挨拶を交わしてゐる。そして此の日に御供番を命ぜられたその一人梅沢という人の家に初めての寄り合いを行つてゐる。この後何日かおきに各家持廻りで寄り合いを重ねてゐる。勉強会のような会合だつたのだろう。

この会合から推して御供番を仰せつかった者は七人で、五十石から百石の知行取の藩士である。藩主忠実は五月十八日に帰城し

文政二年五月、金
御城中御供番日記
内山家藏

供番日記 内山家藏

御入案内社ハ幡江御参詣夫よ

列夜四ツ時御帰り

少しがれ難い点もあるが、朝の

四時から夜十時までの強行軍、御

供衆の氣使いが大変だつたろう。

八月二十六日錦姫様向御屋敷

へ被へ入ニ付殿様も御出有之

押目付以上麻上下御道具持上

下其外白丁

て、二十四日に即は堂に行く。風

雨甚敷しとある。即は堂は總社の

境内にある酒井家の位牌堂である。

姫路へ所替の際忠恭が建立し、前

橋の菩提寺龍海院の隠居を住職に

招いた。その後も龍海院から役僧

を呼んで守らせた。(姫路城史)

在城中は再々即は堂に歩を運んで

いる。

正月の参詣である。御供衆の服

装も正装である。不明門は總社の

向屋敷お成りと位置が違うのでそ

れを図示したのである。(別図参

同じく五日の分。

同五日五ツ時御供揃ニ而即是

堂江被為入横付也夫より御歩

行ニ而好古堂江被為入御供不

残聴聞尤脱劔西役のし日麻上

下押目付以上麻下

次に應野に遠出の場合

正月十九日曉七時御供揃ニ而

御鷹野被為入惣御供押供尤内

京口門より御出御供神谷ニ而

落阿弥陀村迄御乗輿夫より中

筋村御休夫より高砂御屋農人

町より御本陣迄御行列御屋後

口里邊江被為入御本陣より御

藏御門迄御行列夫より御供寺

家町へ廻御町入之節御本城迄

行列此處御小休同所より加古

川舟場迄御行列神谷より御行

正月元日六時御共揃ニ而即是

堂江被為入夫より惣社御門御

通不明御門御入惣社江御參詣

夫より不明御門御出惣社御門

名彦博、通稱三郎右衛門敬所と号した。宝曆十一年(一七六一)京都に生れる。父は近江国坂本の人、川喜多氏。猪飼は養家の姓。はじめ石門心学を修したが、二十三才のとき儒学をもっぱらにし、岩垣童溪の門に入る。後仙石家に招かれて但馬にゆく。晩年津に移り藤堂侯の賓師となり、弘化二年(一八四五)その地に没する。八十五才

少し解り難い点もあるが、朝の

四時から夜十時までの強行軍、御

供衆の氣使いが大変だつたろう。

八月二十六日錦姫様向御屋敷

へ被へ入ニ付殿様も御出有之

押目付以上麻上下御道具持上

下其外白丁

て、二十四日に即は堂に行く。風

雨甚敷しとある。即は堂は總社の

境内にある酒井家の位牌堂である。

姫路へ所替の際忠恭が建立し、前

橋の菩提寺龍海院の隠居を住職に

招いた。その後も龍海院から役僧

を呼んで守らせた。(姫路城史)

在城中は再々即は堂に歩を運んで

いる。

正月の参詣である。御供衆の服

装も正装である。不明門は總社の

向屋敷お成りと位置が違うのでそ

れを図示したのである。(別図参

同じく五日の分。

同五日五ツ時御供揃ニ而即是

堂江被為入横付也夫より御歩

行ニ而好古堂江被為入御供不

残聴聞尤脱劔西役のし日麻上

下押目付以上麻下

次に應野に遠出の場合

正月十九日曉七時御供揃ニ而

御鷹野被為入惣御供押供尤内

京口門より御出御供神谷ニ而

落阿弥陀村迄御乗輿夫より中

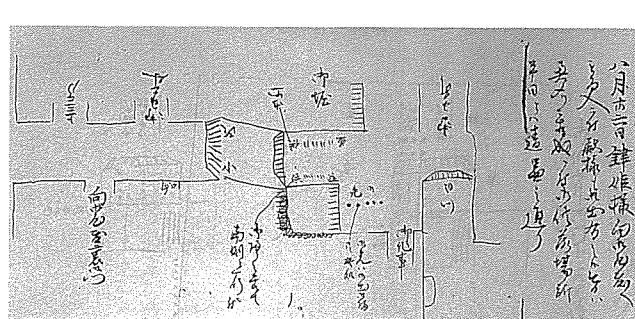
筋村御休夫より高砂御屋農人

町より御本陣迄御行列御屋後

口里邊江被為入御本陣より御

藏御門迄御行列夫より御供寺

家町へ廻御町入之節御本城迄



御供落場所の図 内山家藏

節字遺稿 卷下詩

元姫路学院女子短期大学副学長

田中倫橋

(第三回分)

7、吊梅児塚

梅児の塚を弔う

七言絶句「上平声・支韻」

墨堤艸色望迷離、
墨堤艸色望迷離、懷古情深復問誰。
懷古情深復問誰。花影鳥聲春寂寂、
花影鳥聲春寂寂、復た誰をか問わん。
復た誰をか問わん。花の影鳥の聲
花の影鳥の聲春寂寂た
春寂寂た

昔を懷かしく思う情が深くま
た誰をたずねてよいやら。
花の影にも鳥の鳴き声にもな
んとなく春の淋しさがただよう。
梅児王孫の墓前に長時たたずむ。

(1)、迷離 明らかでない様子。
堤の草が遠くまで、
霞などで、ぼんやり
続いて見えるさま。

この詩の特長

8、厨中鼓擬藥府
厨中之鼓 樂府に擬う
諱詰夜熟漏聲中、諱詰夜熟
漏声の中、

一壺之酒何以下、一壺之酒何を
以て下すや、
夜の時が進むのも忘れて談話
がはずむ。

お酒にはどんな肴を当てたら
よいやら、

(1)、語釈

北条時頼をいう。時頼は、

安貞一年(一二三二)から弘長三年(一二六三)

まで、執権として善政を

施した。執権職を退いて、

最明寺で出家した。出家

後、諸国を行脚して、民

情を観察したという。そ

の話の一つに、上野の佐

野で大雪に会い、源左エ

門の家に泊めてもらい、

は、誰の墓なのか分からぬが、
王孫というからには、由緒ある
ものなのだろう。注もついていな
いので、今となってはその由来が
明瞭でないのは惜しまれる。

詩体は平凡な七言絶句だが、早
春の墨堤の慕情や、王孫の話が偲
ばれて、何となく奥ゆかしい。

絶句のほのぼのとしたロマンチッ
クがただよう。

將軍逆旅事可嗟、
將軍の逆旅の事

は嗟ずべし、

田氏作量齊君亡、
田氏、量を作し

齊君亡び、
齊君亡び、

子産濟人鄭民歌。
子産人を濟い

鄭の歌あり。
鄭の歌あり。

子産は鄭の人々を救ったので、
鄭の民は平和の歌をうたう。

あなたはご覧にならないか。

執権どのは残り味噌で民の腹を

整えたが、

どうして残り味噌で自分の食

べ物を調べなかつたのか。

さてがの堯も糾もこにたまげ
る。

て逃げてしまうだろう。

執権どのが僕約を守るのはお

家のためだが、

将軍としての館の事件は耻ず

かしい。

田单は量を使つたために齊君

を亡ぼし、

子産は鄭の人々を救つたので、

鄭の民は平和の歌をうたう。

あなたはご覧にならないか。

執権どのは残り味噌で民の腹を

整えたが、

どうして残り味噌で自分の食

べ物を調べなかつたのか。

さてがの堯も糾もこにたまげ

る。

て逃げてしまうだろう。

執権どのが僕約を守るのはお

家のためだが、

将軍としての館の事件は耻ず

かしい。

田单は量を使つたために齊君

を亡ぼし、

子産は鄭の人々を救つたので、

鄭の民は平和の歌をうたう。

あなたはご覧にならないか。

執権どのは残り味噌で民の腹を

整えたが、

どうして残り味噌で自分の食

べ物を調べなかつたのか。

さてがの堯も糾もこにたまげ

る。

て逃げてしまうだろう。

執権どのが僕約を守るのはお

家のためだが、

将軍としての館の事件は耻ず

かしい。

田单は量を使つたために齊君

を亡ぼし、

子産は鄭の人々を救つたので、

鄭の民は平和の歌をうたう。

あなたはご覧にならないか。

執権どのは残り味噌で民の腹を

整えたが、

どうして残り味噌で自分の食

べ物を調べなかつたのか。

さてがの堯も糾もこにたまげ

る。

て逃げてしまうだろう。

執権どのが僕約を守るのはお

家のためだが、

将軍としての館の事件は耻ず

かしい。

田单は量を使つたために齊君

を亡ぼし、

子産は鄭の人々を救つたので、

鄭の民は平和の歌をうたう。

あなたはご覧にならないか。

執権どのは残り味噌で民の腹を

整えたが、

どうして残り味噌で自分の食

べ物を調べなかつたのか。

さてがの堯も糾もこにたまげ

る。

て逃げてしまうだろう。

執権どのが僕約を守るのはお
家のためだが、
将軍としての館の事件は耻ず
かしい。

田单は量を使つたために齊君

を亡ぼし、

子産は鄭の人々を救つたので、

鄭の民は平和の歌をうたう。

あなたはご覧にならないか。

執権どのは残り味噌で民の腹を

整えたが、

どうして残り味噌で自分の食

べ物を調べなかつたのか。

さてがの堯も糾もこにたまげ

る。

て逃げてしまうだろう。

執権どのが僕約を守るのはお

家のためだが、
将軍としての館の事件は耻ず
かしい。

田单は量を使つたために齊君

を亡ぼし、

子産は鄭の人々を救つたので、

鄭の民は平和の歌をうたう。

あなたはご覧にならないか。

執権どのは残り味噌で民の腹を

整えたが、

どうして残り味噌で自分の食

べ物を調べなかつたのか。

さてがの堯も糾もこにたまげ

る。

て逃げてしまうだろう。

執権どのが僕約を守るのはお

家のためだが、
将軍としての館の事件は耻ず
かしい。

田单は量を使つたために齊君

を亡ぼし、

子産は鄭の人々を救つたので、

鄭の民は平和の歌をうたう。

あなたはご覧にならないか。

執権どのは残り味噌で民の腹を

整えたが、

どうして残り味噌で自分の食

べ物を調べなかつたのか。

さてがの堯も糾もこにたまげ

る。

て逃げてしまうだろう。

執権どのが僕約を守るのはお

家のためだが、
将軍としての館の事件は耻ず
かしい。

田单は量を使つたために齊君

を亡ぼし、

子産は鄭の人々を救つたので、

鄭の民は平和の歌をうたう。

あなたはご覧にならないか。

執権どのは残り味噌で民の腹を

整えたが、

どうして残り味噌で自分の食

べ物を調べなかつたのか。

さてがの堯も糾もこにたまげ

る。

て逃げてしまうだろう。

執権どのが僕約を守るのはお

家のためだが、
将軍としての館の事件は耻ず
かしい。

田单は量を使つたために齊君

を亡ぼし、

子産は鄭の人々を救つたので、

鄭の民は平和の歌をうたう。
あなたはご覧にならないか。

執権どのは残り味噌で民の腹を
整えたが、
どうして残り味噌で自分の食
べ物を調べなかつたのか。

さてがの堯も糾もこにたまげ
る。

て逃げてしまうだろう。

執権どのが僕約を守るのはお

家のためだが、
将軍としての館の事件は耻ず
かしい。

田单は量を使つたために齊君

を亡ぼし、

子産は鄭の人々を救つたので、

鄭の民は平和の歌をうたう。
あなたはご覧にならないか。

執権どのは残り味噌で民の腹を
整えたが、
どうして残り味噌で自分の食
べ物を調べなかつたのか。

さてがの堯も糾もこにたまげ
る。

て逃げてしまうだろう。

執権どのが僕約を守るのはお

家のためだが、
将軍としての館の事件は耻ず
かしい。

田单は量を使つたために齊君

を亡ぼし、

子産は鄭の人々を救つたので、

鄭の民は平和の歌をうたう。
あなたはご覧にならないか。

執権どのは残り味噌で民の腹を
整えたが、
どうして残り味噌で自分の食
べ物を調べなかつたのか。

さてがの堯も糾もこにたまげ
る。

て逃げてしまうだろう。

執権どのが僕約を守るのはお

家のためだが、
将軍としての館の事件は耻ず
かしい。

田单は量を使つたために齊君

を亡ぼし、

子産は鄭の人々を救つたので、

鄭の民は平和の歌をうたう。
あなたはご覧にならないか。

執権どのは残り味噌で民の腹を
整えたが、
どうして残り味噌で自分の食
べ物を調べなかつたのか。

さてがの堯も糾もこにたまげ
る。

て逃げてしまうだろう。

執権どのが僕約を守るのはお

家のためだが、
将軍としての館の事件は耻ず
かしい。

田单は量を使つたために齊君

を亡ぼし、

子産は鄭の人々を救つたので、

鄭の民は平和の歌をうたう。
あなたはご覧にならないか。

執権どのは残り味噌で民の腹を
整えたが、
どうして残り味噌で自分の食
べ物を調べなかつたのか。

さてがの堯も糾もこにたまげ
る。

て逃げてしまうだろう。

執権どのが僕約を守るのはお

家のためだが、
将軍としての館の事件は耻ず
かしい。

田单は量を使つたために齊君

を亡ぼし、

子産は鄭の人々を救つたので、

鄭の民は平和の歌をうたう。
あなたはご覧にならないか。

執権どのは残り味噌で民の腹を
整えたが、
どうして残り味噌で自分の食
べ物を調べなかつたのか。

さてがの堯も糾もこにたまげ
る。

て逃げてしまうだろう。

執権どのが僕約を守るのはお

家のためだが、
将軍としての館の事件は耻ず
かしい。

田单は量を使つたために齊君

を亡ぼし、

子産は鄭の人々を救つたので、

鄭の民は平和の歌をうたう。
あなたはご覧にならないか。

執権どのは残り味噌で民の腹を
整えたが、
どうして残り味噌で自分の食
べ物を調べなかつたのか。

さてがの堯も糾もこにたまげ
る。

て逃げてしまうだろう。

執権どのが僕約を守るのはお

家のためだが、
将軍としての館の事件は耻ず
かしい。

田单は量を使つたために齊君

を亡ぼし、

子産

| | | | | | | |
|---|--|----------|--|-----------------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|
| (11)、(10) 田 逆 | (9) 紂 | (8) 堯 | (7) 大 | (6) (5) 殘 皮 | (4) 厨 | (3) (2) 漏 譚 |
| 氏 旅 | 著 | 階 | 牢 | 鼓 | 棚 | 聲 話 |
| はたごや。 | 著 | 堯 | 牢 | 「鼓」は、味噌・ 納豆などをいう。 | 「鼓」は、味噌・ 納豆などをいう。 | 水時計の水が落ち る音。 |
| はたごや。 | 中国 | 堯 | 「牢」は、牛・羊 豚などのごちそう。 | 時頬は味噌で酒を 飲んだ伝説がある。 | 時頬は味噌で酒を 飲んだ伝説がある。 | 談話すること。 |
| 齊が攻撃され、田 戦国時代、齊の政 治家。燕の楽毅に 水時計の水が落ち る音。 | 古代の殷の最 後の天子で、暴虐 無道の生活をなし、 ぜいたくな箸を使 用したという。 | 堯 | 質素な生活を好み、 宮殿の階段は僅か に三尺に過ぎなかつ たので、「堯階三 尺」という。 | 「堯」は、堯帝は 中国古代の堯帝は 豚などのごちそう。 | 「堯」は、堯帝は 中国古代の堯帝は 豚などのごちそう。 | 秘蔵の鉢の木をたいても てなしを受けた逸話が伝 わる。 |

| | | | |
|----------------------------|--------|--------|--|
| (1) 押韻 | (14) 餓 | (13) 執 | (12) 子産 |
| 上平声一東韻 公・中・紅 仄声質韻 鼓・異・避 | 餓 餓 | 執 執 | 春秋時代の鄭の政治家。簡公・定公など四君に仕え、晋楚両大国にはさまれた鄭の国の繁栄を招来し、二十六年もの長期にわたり、人民を救済したので有名である。 |
| 上平声一東韻 公・中・紅 仄声質韻 鼓・異・避 | 餓 餓 | 執 執 | 鎌倉幕府の最高の権力を握った役職。この字はない。餓の誤りである。食物をいう。 |



故島田清先生

島田清先生を悼む

つぎのように、ある面までは成している。

① 第一句が六字句であり、十三句が十字句であって、の他の句は七字句に作つてゐる。

② 押韻は、上平声一東韻・声賓韻・下平声歌・麻韻・声入声韻の四種を使用し、声押韻は最後の第十三・十旬の二句のみである。

③ 詩の内容も、②の押韻とくマッチさせて、作つていゝすなわち、全詩を四段に分ている。

i 第一段 第一句～第四句 時頬の酒肴探し

立山崎高等女学校にて教鞭を執られた。後丘庫廩所在勤になられ文化係長、古文化研究会長、教研修所資料室長、史蹟調査委員會子短期大学教授に就任された。どのように教育、文化関係の要職歴任されたのであります。

この間先生は古代より近世、代に亘る幅広い郷土史の研究を

ii 第一段 第五句～第八句 場面。

台所の棚から残り
味噌を発見。

iii 第三段 第九句～第十二句 儉約を守り旅の宿
も質素だった。田
氏と子産の引用。

iv 第四段 第十三句～第十四句 公の食物は粗末だっ
た。

3、第十一・十二句に田氏・子產
の詩を引用しているが、内容上
どんな目的で引用したのか不鮮
である。
(以下余白)

れ、その識見は絶大である屈指の
郷土史家であります。その著作論
文においては枚挙に遑なしの量で
あります。

当頃彰会などに対しましても、発会並
初より懇切な御指導を戴き、また
毎号に貴重な稿をお寄せ下さいま
した。誌面を一層秀麗なり得たの
も、先生の御支持によるものと同
人一同深く感謝しております。

茲に先生の御冥福を心からお祈
り致します。